「あいなく目を側めつつ」解

安藤和幸（助教授・一般教科）

要旨

『源氏物語』冒頭の「あいなく目を側めつつ」をどう読むのか。これまでどう読まれてきたのか。「あいなし」の語義は何かを論じた。

『源氏物語』桐壺巻の冒頭近く

「人のそしりをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れあしかりけれと、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに」

小学館日本古典文学全集（以下テキストとして使用していく）は、「あいなし」の注として「諸説あるが、ここでは帝の行いに対し、上達部・上人が、表立てるわけにはゆかぬが、困惑し、不快に思っている感じと見る」と述べ、〔どうも困ったなりゆきと思い、目をそむけそむけしていて〕と現代語訳を記している。

「あぢきなう」は、「なりて」にかかると注記して、〔おもしろからぬこと、人々のもてあましの種になって〕と訳されている。

岩波書店新日本古典文学大系では、〔筋違いなことに横目づかいをしいしい〕とある。

かつて私は源氏物語を中心として「あいなし」の語義を考え、論文にした。「あいなし考―源氏物語の場合」で、北海道大学「国語国文研究」第五九号に載った。十五年前。「あいなし」は「合ひ無し」で、本来あるべき状態・事を違えて現実にいまある状態・事について喚起される情感、すなわちことのそぐわない、そうあることはどうかと思えるといった気持ちを表すと定義し、「便なし・たいだいし・あるまじ」を系列として上げ、軽重の図を示した。とつおいつの思案の最後に、「あいなく目を側めつつ」が残った。

時枝誠記「語の意味の体系的組織は可能であるか」（昭和十一年：『言語本質論』所収）

「あいなく」
- 情意性意味＝不本意、庶幾せざる
- 状態性意味＝自然と、訳もなく、無性に

主語は「上達部上人」である。対象は、上文に示された様な帝の御も

てなしを指すのでなく、下の用言「目を側めつつ」を修飾し副詞格とすべきである。即ち「正視せんにも、自ら目をそむけざるを得ない。無性に目を側めて通る様な盛んな御覚え」の意である。「無愛」の意に解して、「面白からず思ふ」「疎ましく思ふ」等と解するのは不適当である。総じて諸註釈書が、此の源氏冒頭の文に於いて、帝及び更衣に対する宮廷の反感を主題と見るは当らない。作者に於いては寧ろ帝の御寵愛の無限至極なるを表はしたものと解さなければならないと思ふ。（中略）

「あぢきなう」の主語は作者であつて、「人の持て悩み種になる」ことを残念、遺憾に思ふことである。宣長は此の語の主語を「天の下の人」とし、それを踏襲した多くの註釈書があるが、ここは、天下の人が帝の御行為に対してあぢきなく思つたのとは正反対に、作者は、世の人が噂にすることを残念遺憾に思つて居るので、此の一語の理解によつても相当重要な問題が生ずる訳である。

世の人の物言ひぞ、いと味気なく怪しからず侍るや

と同じ思想と私は思ふのである。」

この教示から私は、「上達部上人など」が「あいなし」と思ったのではなく、「目を側め」たそのことを「あいなし」と言われている、言っているのは語り手で、〝語り手の評〟であると述べたが、「〝語り手の評〟とする「あいなく」が、例えば「めでたし・をかし」と物語世界を客観的に現出せしめる語りに近いものなのか、それをぬけて語り手のコメントをあらわにする主観的語りなのか、そのはっきりした例として草子地があるが、草子地と同質のものであるか、広く源氏物語における語り・表現の機構・性格を明確に見定める要を感ずる」と結んだ。

時枝は述語格から副詞格に移行し、状態性意味の〔無性に〕と読み換えたが、私は〔そぐわぬことながら、いかがなものか〕と解した。

その後見定めの行く手は密林の迷宮となった。

二

新体系本の〔筋違いなことに〕は、述語格・副詞格どちらも読めるが、「上達部上人など」が〔横目づかいをし〕ている、それは〔筋違いなことだ〕との読みなのであろう。

「上達部上人なども、あいなく目を側めつつ」と「天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて」は対応しているが、「あぢきなく」はどうなのだろう。全集本の読みでは〔どうにも困った〕の殿上人の困惑が、世の人の〔おもしろからぬ〕の非難となっていく。

「あいなし」「あぢきなし」の用例を源氏物語に見ていくと、〔どうかと思える、いかがなものか〕の「あいなし」が、〔ひどい、あるまじきことだ〕に向かうと「わりなし」となるが、そのなかばに「あぢきなし」があると思える。苦々しい思いが、「あぢきなし」にあると思う。

先の論文の時、「ことわりの語」の系列に「わりなし」は載せなかった。「わりなし」や「あぢきなし」は、嫌だ、やりきれないという感情を含んだもので、〔つまらない、面白くない〕と訳されることが多かった「あいなし」を感情に行く前のことわりの語として区別したいと思った。しかし「あいなし」の〔いかがなものか〕の軽から、「わりなし」の〔とんでもないことだ〕の重へ向かうと判別できたとして、〔とんでもないことだ〕と〔たまらなく嫌なことだ〕の判別はつきにくい。似たことは「いみじ」についても言えるだろう。「いみじ」は「ことわりの語」であるよりも、一般的表現に使われる語で〔大層なこと、あまりなこと〕と私は読むが、喜びにも悲しみにも使われる。他に〔嫌だ、やりきれない〕の思いを表わす語に「うたて」があると、思いはひろがっていくが、今は「あいなし」に限定して、本題にもどる。

私は先に迷った果てに「あいなく目を側め」の「あいなく」を時枝論文に従って副詞格と読んだが、全集本のように下文の「あぢきなう」と整合づけて述語格「あいなく」と読むべきなのだろうか。時枝は「あい

なく」「あぢきなう」はともに副詞格と認定しているが、「あいなく」を〔無性に〕と状態性意味、「あぢきなう」を作者のことわりと解し、私は「あいなく」を作者のことわりと読んだ。

当時「あぢきなう」との整合を考えていなかった。私は「あぢきなう」を世の人の〔よからぬこと〕の思いと「なりて」と読むが、述語格となり矛盾する。

どう読むか。これまでどう読まれてきたか、諸氏の解釈をみることで考えてゆきたい。

本居宣長『源氏物語玉の小櫛』

「あいなく　此詞数もなく多く有、そをことごとく見わたし合せて、かむかふるに、何といふわきまへもなしに、うちつけに物すること也、ここもその意にて、おのが身にかからぬ人までも、何といふことなしに、目をそばむる也、注に、無愛也、あぢきなく也などいへる、皆かなはず

あぢきなう　天の下の人も、あぢきなき御わざをするよし也、或抄云、はじめに女中のねたみをいひ、次にかんだちめうへ人といひ、ここに天の人にもといへり

わりなく　あるまじき事を、しひてあながちにすること思ふこと也

あいなだのみ　すべて此詞は、いかにあらんもしりがたき、行末の事を、そのわきまへもなく、頼みに思ふこと也　弄花細流に、かひなき頼みとあるもたがへり」

「あいなだのみ」は、「あいなきたのみ」であるが、宣長は「わきまへもなく」と共通してふまえているが、「うちつけに物すること」の解は時枝の〔訳もなく、無性に〕の訳になっていくのだろうが、私はとらない。宣長は「すずろにかなし　さもあるまじき事に、何故となく、おぼえずかなしきなり」と示す。〔訳もなく、無性に〕にあたる語は、「すずろ」であろう。

宣長が今から二百年前、源氏物語は千年前、「あるまじき」の規範意識は日常生活のすみずみまで及んでいた、その現れがことわりの語「あいなし・わりなし」の多用であったろう。『古典対照語い表』によると「わりなし」一六一例、「便なし」四七例、「あいなし」一〇一例、「あぢきなし」六六例、「あし」一二一例。一番多く使われている形容詞は「なし」の三三四六を別格として「いみじ」六九〇、ついで「多し」五六六、「をかし」五三四、「よし」五二七。宣長が『源氏物語』の神髄とした「もののあはれ」の「あはれ」は九四四例を数える。

「此のうちあひは、其女の、身のほどにあひかなひて、何事もすぐれたるをいふ」「うちあふは、物のととのほり、そろひたること也」と宣長の注を見るが、この「あふ」が「あいなし」の「あい」、「合ひ」の音便形と私は考える。

すでに先覚の指摘にあるが、「あいなし」は歌には使われていない。歌は音便形の語を用いることを法度としていたからだと。

逆の例は、「もののあやめもわかぬ」の「あやめ」からきた「あやなし」で、「あいなし」と同義語にみられたりするが、源氏物語一七例は、歌で使われているのが六例、古今歌躬恒の「春の夜の闇はあやなし梅の花」にかけたのが五例、古今歌業平の「あやなく今日はながめ暮らさむ」を引いたのが一例と偏向している。

「あやなきすさび事」（明石二四八　『源氏物語大成』にあたると、河内本は「あいなき」）「すさび事もあひなく思しければ」（真木柱三八四）「けしからぬすさび」（紅葉賀三九五）とひろうことで「ことわりの語」として同系列に考えられる一証左を得る。

北山谿太『源氏物語の新解釈』

「「あいなし」は、然るべからぬさまである（コレガ根本義）→さようにあるべきではない・あるまじきことである・当然な度合をかけ離れている。むやみにしかじかである・あまりにしかじかである・むしょうにしかじかする・宜しくないなどの意。同輩の婦人たちならばともかく、上達部や上人などが目をそむけるとは、あまりに物のわきまえなく、然るべからぬことであるという考えから、「あいなく」といったのである。〔むやみに目をそらしそらしするような有様で〕

「あぢきなう」は「もてなやみ」にかかるものであろう。即ち、人のあぢきなう（アヂキナシト）もてなやむ（処置ニ苦シム・モテアマスナドノ意）、言いかえると、人のにがにがしく思うもてあましものになっての意。「あぢきなう」なる副詞が、もてなやみぐさという名詞の一部分である「もてなやみ」にかかるようなことは、少し無理な言い方であるが、こういう言い方も、当時行われたものと見えて、類例が次のように見出される。　（五例　略）

〔人々のにがにがしくもてあます種となって〕」

日本古典文学体系『浜松中納言物語』（松尾聰）補注

「「あいなし」は語意がなお明らかでない。源氏物語の一〇〇に近い用例から推測して「こうこうしたところでどうにもならない（どうにもしようがない）状態だ」というような意と解くと通じるようである。ただし例外もあるので、今後の研究が必要である。」

山崎良幸『源氏物語の語義の研究』

「「あいなく目をそばめつつ」の「あいなく」　「何とかしなくてはならないと思う、しかしどうしようにもすべがないのである、ただそこには困惑と諦観の思いだけが複雑に入り混っている」、そういう心情ないしは情緒の表現なのである。〔どうしようもない思いで〕

「天の下にもあぢきなう」の「あぢきなう」　「それは条理にもとり、ことわりをこえて、正にあり得べからざることなのである。しかもせん方なしと嘆くほかない、そういうやり切れない心の表現」であり、しかもそこには、批判ないしは評価の意があるのである。そう解してはじめて、前文における危機感の表現とも照応し、また後文の、容易ならぬ「天の下」の人々の「もてなやみぐさ」にも意味的に連続し得ることになるのではないか。〔まるで帝王の道を外れた、こんなことがあってよいのか〕〔まっとうでない、狂ったこと〕

○「あいなし」　何とかしなければと憂えつつも、処理すべきすべを見失ったものの諦観と歎きの心の表現で、本来評価の意識はない。「どうしようもないと嘆く、困惑と諦観の心の表現」

○「あぢきなし」　本来筋の通らぬ、条理を越えた性質またはさまを表わす。転じて、ことわりの存在を認め難いこと、または容認できないことに対して、「何とわけのわからぬことよ」と思い、「こんな筋の通らぬことがあり得るのか」と嘆く心の表現に用いられ、そこに主体の批判ないし評価が表現される。

「あいなし」を情緒的表現だとするならば、「あぢきなし」は理性的表現だと解することもできようかと思うのである。」

山崎氏は全集本のように、上達人上人などが「あいなし」と思い、天の下に「あぢきなし」と思われるようになったと読んでいる。

切迫した状況での「あいなし」「あぢきなし」を〔わけもなく・つまらぬ〕〔苦々しく・おもしろくない〕と読むのは、「低俗のそしりを免れない」との山崎氏の言はその通りと私は思う。しかし、語義をめぐって

四

の山崎氏の理解と私のとは逆になっている。そして私は「全く筋が通らない、無理もはなはだしい、あまりなことだ」を「わりなし」で、それよりも軽い「どうかしら、あんまりでないかしら」を「あいなし」で理解する。

「「あいなし」は何とかしなければ、と苦慮しながら、しかも対応または処理すべきすべを見失って、混迷する心の表現に用いられる。従ってそれはしばしば懊悩する人間の心理描写の場に用いられるのである。

形容詞「あいなし」の連用形は、その音便形「あいなう」を含めて、すべて五七例を数えるのであるが、それらすべての用例にわたって、右のような意義を担うものと解して、ほぼ妥当な文意の把握が可能になるように考えられるのである。しかも連用形「あいなく」の用例を通して捉えられた意義は、実は他の活用形の用例についても適用できるようである。」と山崎氏は副詞格では意味が移ることはもとより、述語格・副詞格の別を立てずに一義にとどまる。

「岩波古語辞典」等の説明をとりあげた上での山崎氏の結論である。

「岩波古語辞典」を編んだ大野晋氏は「日本文化研究」第九巻で、「あいなく目をそばめつつ」を「人々は桐壺の更衣を愉快に思うことができない。しかも、その感じを表立って表わすこともできない。心の中何となくいやで仕方がない。」と述べ、「あいなし」を「何かこちらがまともに対そうとしても、そのものはたよりなく、こちらの思うようにならず、いやな感じであるという、そういう意味合い。表立ってそれをにくみ、いかり、嫌悪することはできないながら、しかも自分にどうにもならず、ほのかな不愉快な感じを消し去れない、そうした感じを表わす言葉。」と言っている。

「あいなし」の解は「無関係だ・うつりが悪い」で、「客観的形容に使う語なら、もっと後まで残ったろう。これが消えて行ったのは、あいなしが極めて主観性の強い、かすかな気分を主とすることばであったから」と述べている。

「岩波古語辞典」には「おそらく語源は「あひ（合）なし（無）」であろう。はじめは、本来何も関係がない、筋ちがいである、という意で使われたが、筋ちがいで気持がよくない、違和感があっていやな気持である、など微妙な感情をこめて使われるようになり、副詞的には、本来何の関係もないのに、の意から、ひとごとながら、よそながら、などの意に発展した。」として、「（本来）何の関係もない。筋ちがいである。（本来の筋にはずれて）本意でない。」等の意味をあげ、「〔副詞的に用いて〕①（本来何の）関係もないのに。②筋ちがいにも。③ひとごとながら。④よそながら。」と、多くの辞典がしているように、副詞的用法を立て、更に四項に意味を分けている。山崎氏は〔どうしようもない〕、私は〔いかがなもの〕で全てを読み切れると考えている。

石川徹「源氏物語必携－源氏物語語彙辞典」も、時枝が迷った述語格か副詞格かの識別が容易でないことを言っている。氏は「合無し」よりも、「相合」の約「あはひ」無しを原型と考えた方がよい、「両者の間に関連性が無い」を原義と想定し、「あはひ」は色の配合も言うことで、「配合が悪い、不調和だ、不釣合だ、ちぐはぐだ、しっくりしない、ふさわしくない、そぐわない、ぐあいが悪い、どうもまずい、適切でない」と語義を言っている。

「あいなく目を側めつつ」は、〔目をそばめなくてもよいのに、目をそばめそばめして〕〔目をそばめても何もならないのに、目をそばめそばめして〕、元来は〔目をそばめてはいけないのに、目をそばめそばめして〕「ここの「あいなく」は適切を欠くという意味、臣下として時宜にかなった、しっくりした効果的な動作でないのを評した。（中略）「目を側める」のは人間としてやむをえないが、臣下の本分からいえばほめ

た話ではない。望ましくない事態の発生である。それを「あいなし」と書いた。

どうも感心したやり方ではないが、まことに遺憾千万ないたし方だが、まことにぐあい悪いのだが、どうも困った話だが、不本意ながらほかにしかたもなく、心ならずもしようことなしに、といった訳語があたる。

かく観点奈何で、あるいは恕し得、あるいは恕し得ない、矛盾不調和を意識するところに生ずる批判的なことばとして、効果百パーセントに使用されている。」

二十例を越える例文検討の結論としてこう述べる。「「あいなく…」の形で、紫式部は人間の永遠に変わらない普遍的性質をとらえ、他方平安朝の現実社会の中で、当時の一般儀礼や道徳的慣習や固定的通念に取り囲まれた宮廷人たちの姿をよく観察し、この二つのものが矛盾衝突したときに露呈される、またはちらりと覗くことのできる人間の心理の機微・感情の混乱をよく写し出している。」

石川氏は「平安文学研究」第十八輯で、「天の下にもあぢきなう」の「あぢきなう」を「桐壺更衣の存在が無益なばかりか、かえって天下を危うくする厄介な存在になってきたというので、〔困りもの、弱った存在、もて余し、始末が悪い、迷惑、難物、難儀、処置に窮する〕」「「あぢきなし」は「それにふさはぬ。ふさわしくない。適当しない」を原義として、〔1およそ無意味だ。2始末が悪い。〕」と説明している。

「あいなく」の〔ぐあいが悪い〕と「あぢきなう」の〔始末が悪い〕は同じである。山崎氏は「これまでの注釈書類においては、形容詞「あいなし」と「あぢきなし」とをほとんど同義語のように取扱っている」「〔つまらぬ〕〔面白くない〕〔何もならぬ〕の三語が、両者に共通して用いられ、しかもそれが全訳語の大部分を占めている、という実情にあるのである」と語義究明のはじめに述べている。

六

古語辞典はいくつも訳語を載せるのが常だが、その背後にある語義研究の累積はこれまで見てきたようにさまざまな読みによるもので、語義確定がむずかしい。一つの言葉は一つの包括的概念をもつ。辞典はその枠内にとどまるべきであろう。平安時代のおびただしい和歌は、新たな表現を求めた。その基盤の上に立つ物語文学も言い古された表現をこえようとした。一つの言葉の概念の枠内はやぶられようとする。この読み取りは千年を経た我々には容易でない。まずは言葉どうしの語義の異なりの確定が行われるべきだと思う。

いくつか例文をとりあげて考えを続けたい。

1　音もいと二なう出づる琴どもを、いとなつかしう弾き鳴らしたるも、御心とまりて、（源氏）「これは、女のなつかしきさまにてしどけなう弾きたるこそをかしけれ」と、おほかたにのたまふを、入道はあいなくうち笑みて、（入道）「（略）」と聞こゆるままに、うちわななきて涙落とすべかめり。　（明石二三二）

全集は「「あいなし」は、関連性がない、妥当性がない、の意。入道は、娘と源氏とのことで頭がいっぱいなので、源氏の冗談をまじめにとって、源氏が、自分の娘のことを言ったのだと勘違いして、ほほえんだ。そのことについて語り手は「あいなし」と揶揄的に語るのである。」と頭注に記し、〔わけもなく〕と口語訳している。

石川徹「源氏が箏は女が弾くのがよいと言ったのに対し、娘を源氏にめあわせようといういちずの願いが常に念頭を去らない入道は待ってましたとばかり、強引に話をそこにもっていったのを、作者は「あいなく」と形容したので、うち笑むべき理由もないのに、卒爾として相好を崩して、問わず語りをやってのけたのである。〔なにを勘違いしたのか、急ににこにこして〕〔なんと思ったのか、妙なところで顔をほころばせて〕。

これは冷笑的に用いた例だが、俗人どもが関係のないことにくちばしを突っこんだり無責任な噂をたてるのを「あいなく」と思う例もある。」

私は急に「うち笑」んだことに、一般的叙述（語り手、作者、〃語り手の評〃を立てるのでない、あるいは「話主が作中場面から少し離れたところからつつましくゆるやかに自分自身の感情を入れている」という『平安女流文学の文章の研究』で根来司氏が言う理解ではなく）として「あいなく」〔あるべくもあらぬこと〕が使用されていると読む。唐突に、場違いにと表現するのは、千年を経た我々がすることで、我々からすると未分化なことばと思える「あいなし」だと考える。また、我々の理解からすると「あいなし」は唐突、場違いに思えたりするが、我々との隔たりを我々の思惟で考える限界を据えたい。

全集の頭注や石川氏の説明は我々の読みを深く豊かにしてくれることで大いに裨益を得るが、先にも述べたが諸説が言われている事実があるが、事実の根拠となるものはここまでたどってきたなかで、これといってないのである。

2　藤壺は、おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまし、と思すに、夢の心地なむしたまひける。宮は、やがて御宿直なりける。

（帝）「今日の試楽は、青海波に事みな尽きぬな。いかが見たまひつる」と聞こえたまへば、あいなう、御答へ聞こえにくくて、（藤壺）「ことにはべりつ」とばかり聞こえたまふ。（紅葉賀三八四）

全集「「あいなう」は、心ならずもつい時宜に反して、の意。帝のお言葉に対して本来ならくわしく、しかも即答すべきだが、秘事に苦慮する藤壺にはとっさの適切な賛辞がうかばないのである。〔どうも〕」

石川徹「瞬間の心の機微を巧みに表現している。本来なら帝のお尋ねだからひと返事もふた返事もあるべきところである。また事実、源氏の舞はすばらしかったのである。だから虚心に答えれば、「殊に侍りつ」ぐらいではすましたくないし、すまされもしない。だが、心の鬼に藤壺はとっさにうまいほめことばが出ない。帝に見透かされそうな気がする。一秒たつ。二秒が過ぎる。数秒が針の筵にすわる思い。彼女は混乱した頭の中で、ことばを捜し求めて駈けめぐる。だが心は矢竹にはやるけれど、うまい文句は浮かんでこない。いつまでも黙っていれば帝に変に思われよう。で、ことば少なに、「とても結構でございました」とだけお答えして、そっと胸中の冷汗をぬぐう。〔どうしたことか妙に〕であるが、どうしたわけでもなく、妙でもないことは当の藤壺も読者も知りすぎるほど知っている。作者はさりげなく真相を知っている読者に説明を譲った筆を省いたのだが、「あいなし」の四字をはさんで、読者の注意を喚起した心にくい筆はこび。〔本来ちゃんとしたお返事をしなくてはならないのに不思議にも〕。これも時宜にかなわぬことであった。すべて人間のつくった制度、慣習からはAであるべきに、人性の自然からはそうゆかずBの行動をとる場合をとらえて「あいなく」をほうりこむのである。」

新体系「〔心ならずも〕。詳しく応答できない気持を語り手が評す。「おほけなき心の…」のゆえん。」

山崎良幸「大殿の頭の中将を相手に青海波を舞った源氏に対する賞讃のほどは、「帝涙をのごひ給ひ、上達部皇子たちも、みな泣き給ひぬ」の叙述によっても察せられるのであるが、源氏と藤壺との関係について何もご存じない帝は、藤壺に対して、「如何見給ひつる」とお聞きになったのである。「御答聞こえにくく」ただ「殊に侍りつ」と、かえってそっけない態度と受け取られるようにしか答えようのなかった藤壺の心理の表現には、もはや「あいなく」以外のどのことばも役に立たないであろうとすら思われるのである。」

研究の積み重ねはあるのかも知れない。四者の読むところは同じ。私の定義「本来あるべきことを違えていること」も参入する。帝の「いかが見たまひつる」の問いに、「ことにはべりつ」が当然、しかしそう言えない事情が藤壺の心にあった、その齟齬を「あいなし」で言われている。それをどう現代語で言うのかで諸氏の異なりが生じる。現代の思惟・言語の枠組に置き換えにくいものが奥にほの見えるが、どれだけしかと見出し洗い出せるのか、今後も課題としたい。

語り手の評と注記するのはどんなものだろう。千年の隔たりで語りの機構が違う、どう違うのかの理解が定説を得てはいないだろう。

三者の読みと、山崎氏の読みとの違い。三者は語り手の叙述としているが、山崎氏は「藤壺の心理の表現」と読んでいる。「あいなく目を側めつつ」の読みの問題ともなる。

3　男君の御宰相の乳母、つらかりし御心も忘れねば、したり顔に、
　いづれをも蔭とぞたのむ二葉より根ざしかはせる松のすゑずゑ
　老人どもも、かやうの筋に聞こえあつめたるを、中納言はをかしと思す。女君はあいなく面赤み、苦しと聞きゐたまふ。　（藤裏葉四四九）

女君が「あいなく」思って顔を赤らめたのか、「面赤み」が「あいなく」なのか。文脈もとりにくい。なぜ「面赤み、苦し」なのか。新妻の羞恥心をかきたてるあけすけな古女房たちのことほぎ。新郎の満悦にあわせているといいのに、恥ずかしがって。逆に初々しさを伝えるものなのか。

全集「「あいなく」は、老女房たちの詠歌を、せぬがましの有難迷惑なことと感じたこと。〔間のわるい思いで〕」

参考にしたい次の例がある。時枝誠記は、「深山木に羽うちかはしゐる鳥のまたなくねたき春にもあるかな　さへずる声も耳とどめられてなんとあり。いとほしう面赤みて、聞こえん方なく思ひゐたまへるに」（真木柱三七六）をあげて、「玉葛はつらさに顔が赤くなつて」ではなく、「話者式部の情意の表現と解し、〔お気の毒な事に、お顔を赤くされお返事のしようもなく〕とするのが適当ではないか」と言っている。全集は〔宮のお気持が不憫に思われて、お顔の色が赤らみ〕と読んでいる。私も「いとほしうて」と読みたい。

例文1と例文2と「いとほしう面赤みて」に共通する、「…て」の形を立てることができるのか。

「あいなくまばゆくて」（夕顔二一九）、「あいなくもの恥づかしうて」（少女四三）、「あいなく心うくて」（少女六〇）、「うちつけなるさまにや、とあいなくとどめはべりて、残り多かるも苦しきわざになむ」（橋姫一四三）、「人の思はむことを、あいなう浅き方にやなど、つつみたまふならむ」（総角二三四）、「中の君も、あいなくいとほしき御気色かなと見たてまつりたまひて」（総角二四〇）、「いとうれしきことにもはべるべきかな。あいなくみづからの過ちとなん思うたまへらるる」（早蕨三四〇）の「あいなく・あいなう」は「あいなし」と思う例と考える。夕顔巻以下の四例は述語格「…て」の形にかなっているが、後に副詞格の例を見ることになるが、述語格副詞格の両方成り立つようである。

4　うち赤みたまへる顔のにほひなど、今朝しも常よりことにをかしげさまさりて見えたまふに、あいなく涙ぐまれて、しばしうちまもりきこえたまふを　（宿木三九六）

夫匂宮の六の君との婚儀の夜涙こぼしたそのなごりをのこす「うち赤み」の中の君を匂宮は見て、「あいなく涙ぐまれて」。〔あるべくもあらず〕と思ったのか、「涙ぐむ」ことが〔あるべくもあらず〕なのか。何を〔あるべくもあらず〕というのか。そうでない語義を考えるべきなのか。判別しにくい。全集は「匂の中君の心を察して也（岷江入楚）」を載せ、〔も

うわけもなく〕と訳す。

「世の中の人も、あいなう、かばかりになりぬるあたりのことは、言いあつかふものなれば」（若菜上八五）は、例文1で引いた石川氏が述べた「俗人どもが関係のないことにくちばしを突っこんだり無責任な噂も立てるのを「あいなく」と思う例」にかなうが、私は「あいなく」を〔関係ない〕ではなく、〔あるべくもあらず〕で読む。「あいなき人の御ためにも、いとほしう」（夕霧四一六）は、「よからずものを聞こえ知らする」乳母に取り沙汰されるにふさわしくない例の「あいなき」。「あいなきおほよその人」（竹河八九）もあり、「世の中に幸ひありめでたき人も、あいなうおほかたの世にそねまれ、…あやしきまですずろなる人にもうけられ、…さしもあるまじきおほよその人さへ…涙落さぬはなし」（御法五〇二）、「さしもあるまじきをも、あやしう人こそもの言ひさがなきものにあれ」（夕霧四五四）は例証になる。「おほかたの世の人もあいなくうれしきことによろこびきこえける」（澪標二七〇）は、こうした関連で読まれるし、更に「人々おどろきてめでたうおぼゆるに忍ばれで、あいなう起きゐつつ鼻をしのびやかにかみわたす」（須磨一九一）。涙はあるまじきことで、忍ぶべきなのに涙する。「関係ない」ではとらえられない。ひとまとめにできる例をあげる。「若き人々は…あいなく涙ぐみあへり」（賢木八二）「あいなく涙ぐまる」（賢木一二七）「あいなう御袖もただならず」（若紫三一五）「この旧りぬる齢の僧はあいなう涙もとどめざりけり」（幻五三五）。

次のような定例もある。「大将かくておはすと聞けば、あいなう、すいたる若きむすめたちは舟の中さへ恥づかしう心げさうせらるる」（須磨一九五）、「殿はあいなくおのれ心げさうして、宮を待ちきこえたまふも」（蛍一九〇）、「人知れず思ふ心しそひたれば、あいなく心づかひいたくせられて」（宿木四一二）。「すずろに心げさうしたまひつつ」（初音一四六）という例もある。「人知れず思ふ心」ゆえに、「心づかひ」することは「あいなし」と言われると理解することで、次の例を同様に読めるのではないか。「頭中将を見たまふにも、あいなく胸騒ぎて」（夕顔二六六）、「母宮いみじうかたはらいたきことに、あいなく御心を尽くしたまふ」（澪標二七二）。例文2もここに載る例だろう。

5　「昔、御覧ぜし山里に、はかなくて亡せはべりにし人の、同じゆかりなる人、おぼえぬ所にはべりと聞きつけはべりて、時々さて見つくべくや、と思ひたまへしに、あいなく人の譏りもはべりぬべかりしをりなりしかば」（蜻蛉二〇九）

薫が匂宮に話す。大君の形代浮舟を見出したが、「女二の宮の降嫁のころで、その正室への遠慮から躊躇した。」と全集は注し、〔不都合にも世間からとやかく言われそうなときでございましたので〕と口語訳する。譏りを受けた例として、「あいなく目を側めつつ」をもってきたい。「話主はふつう作中場面に立ち会っている形で説明するのであるけれども、何かのきっかけでその作中場面から離脱して語り場面に移動してゆくことがある。これが古くからいわれている草子地であるが」（根来司『平安女流文学の文章の研究』）など作者の語りはいろいろな位相をとるようであるが、薫の語りも語り手の語りも同一の次元に立つものと読む。更に二つは同じもの言いと読む。「人の譏り」があるのを「あいなし」と表現するのは、薫にすると心外なことだが、薫が直接に「心外だ」と言うのではなく、世間一般の人情として心外なことであるとの「あいなし」であると読む。右に見た口さがない世間の人が譏るようになる、そのことを〔心外だ、けしからぬ〕と言ったのではない、まして〔関係ない〕でも、〔わきまへがない、うちつけに物する〕でも、〔訳もなく、無性に〕でもない。薫も認める「あいなし」であり、〔あるべくもあらぬ〕

ことは即「人の譏り」を招くことになる。「あいなく目を側めつつ」も、帝の目にあまる寵愛ぶりが「あいなし」で上達部上人をして「目を側める」ことを招いた。〔いかがなものか〕との思い。それが口さがなくたしなみを欠く世間の人では苦々しい思いに強まることで、「天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて」と表現された。

以前私自身「語り手の評」を考えたが、全集本の読みをとって読み直すことで結論としたい。

源氏物語の「あいなく」を「語り手の評」と読むのでなく、人の心が当の話題の状況では〔どうか〕と思えることを述べたものとして理解する。こう読むと、上文をうけて「あいなく」と思うことと下に言われる内容を「あいなく」と表現することは接近する。判別が紛らわしくなるのはこうしたことによるのでないか。

そのことと、語りの勢いで言葉が言われ、それが動詞とむすびつくことがあったように思える。「あいなく目を側めつつ」だと、〔いかがなものか〕の思いが先行して「あいなく」が言われ、その思いが具体化される言葉がつむぎだされてくる。それが「目を側め」となった。

どう「目を側め」たのか、「あいなし」と思って。この理解は、半ば現代語に通じるが、半ば通じない。しかし、我々はつい「目を側め」ることは「あいなし」だと読んでしまうが、それとは別な言われ方があったのだということを私なりに考えるに至った。

（平成五年十一月三十日受理）

十